

蒙古襲来

一

蒙古の襲来は、文永四年の九月の国書が、翌五年の正月一日に、九州の太宰府に到着したことにことが始まるのである。

さて、最近蒙古襲来のことに関して、いま私の手許にあるものでも「蒙古襲来」昭和四十年中央公論社著者黒田俊雄、「蒙古襲来の研究」昭和三十三年吉川弘文館著者相田二郎、「蒙古襲来」昭和三十九年桃源社著者山口修、古いものだが大冊で二巻ものの「元寇の新研究」昭和六年東洋文庫著者池内宏、これらの書物は、一ように文永五年の蒙古の国書を無礼なりとしておる。

これは、元禄年間に出た、浅井了意作と言われる、北条九代記も「今蒙古の状書にも、またこれ無礼の文章あり、返状に及ばざる誠に現ことわりとぞ聞えける」と蒙古の国書を批評して無礼なりとは、戦前の我々の常識だったが、ここに戦後の本になるとあながち、そうとはきめきれないのが

あらわれた。

それは、昭和四十年、富山房、著者、文学博士大戸頃重基の「日蓮の思想と鎌倉仏教」の中の、第四章蒙古襲来と日蓮の予言で、

「牒状の文面はそれほど不穏なものでなく、自製の意も書面に溢れ、シナでは、前例のないことだといわれる。ことに牒状が「不宣^{ふせん}」という言葉で結ばれているのは、臣としない意味である。フビライは日本との円満な朝貢を希望していただけとも考えられた。フビライの欲したのは、朝貢でさえもなく、名を天下に高めるためにすぎなかったことがわかる。フビライはただ形式的な服従だけを日本に要求したにすぎない。」これは、昭和三十四年に読売新聞社から出版された、「日本の歴史」鎌倉武士の二五八ページに、その体裁について、モンゴルは、中国としては前例のないほど、ていちょうなものとして注目され、書き出しに「大蒙古国皇帝、書を日本国王に奉ず」とあり、とりわけ、結びを「不宣」としてあるのは、臣としない意味だといわれた。フビライが、いかに、日本の円満をのぞんでいたかが察しられる。

これを比較すると前の文章はこの文章とそっくりであるから驚ろく。前書は非常によく参考書をあげて、読者に対して親切だが、この部分は、参考書を明示してない。「不宣」の文字の解釈をよんで、おやおやそんな意味があったのか、意をつくさずぐらいの意味だと解釈していた己れの無学を恥じたが、だが、どうも変だと、諸橋の漢和大辞典を引いてみたら「不宣Ⅱ友人間の書

簡の末尾に記す語、十分のべつくしていない、不宣備をみよとある。不宣備Ⅱ書翰文用語、十分の意をつくさないこと」とあった。

書を悉く信ずれば書なきにしかずという言葉があるが、どうも驚ろいたことだ。しかも、「日蓮の思想と鎌倉仏教」という書物は、昭和三十九年二月に、東京教育大学文学部に提出した、学位論文というのだからびつくりしたのである。平凡社の世界大百科全書でも、元寇の項目に「その使が蒙古、高麗の両国書をたづさえて、はじめて、北九州にきたのは、文永五年のことである。すでにこれよりさき一二二七年（安貞一年）と六三年（弘長三年）に、日本の武士の来寇の禁止を求める高麗の使がきたことがあり、そのことが、フビライ・カンの日本征戦の一つの理由になったといわれているが、明らかに服属を要求したこの国書の到着」とはつきり書いておる。これが常識だと思いが、戦後の博士の意見とは、斯くの如きものかと深く考えさせられた。これは蒙古の記録（経世大典）にも末尾に不宣と言ったのは臣としないの意を示したものと明記してあるところからきたのだろうが、それはうかつで文永四年の国書をよく読みまたその次に来た国書を読めばそんなのんきなものでないことがわかる筈だ。後日この書に対して批判することがあると思うので、これはこの辺でやめておきたい。

山口修著の蒙古襲来は面白いことがのせてあったので、一寸引用させて貰う（同書二五ページ）
「蒙古人は遊牧民である。財産として家畜を考え、土地としては草原を考える。馬も羊も養えぬ

耕地はいかに広いものであつても大きな価値は認められない。家畜のための牧草を求めて季節ごとに移動する生活が本体であるから、田や畑の收穫を待つて定着する生活は考えられない。したがつて、蒙古人にとつて、中国の沃野には魅力を感じられなかった。すべてを焼き払つて、牧地に化してしまおうと考へたものすらあつた。蒙古帝国の王族たち、また貴族となつた將軍たちは、中国に領地を与えられても、その支配は代官にまかせ、ひたすら農民から税をまきあげることしか考へなかつた。重税のために生活の出来なくなつた農民は土地をすてて流亡する。農地は荒廢する。蒙古人からみれば、自分の支配が悪いためではなく、中国人、というより農耕の民が頼りにならぬ者なる故としか考へなかつた」

「ジンギスカンが華北に侵入したとき「人民を全部追いだして広い草原にしたら、さぞよい草地ができるであろう」と語つたといわれるが、かれらは征服民を住ませておけば、毎年ひとりで收穫が手もとに入つてくることを知らなかつた。かれらは征服によつて、略奪するか、せいぜい財宝を貢物みつぎものとしてとりあげることしか考へず、手工業者だけは品物をつくらせる為に本国につれていった」

「蒙古襲来」日本の歴史二〇ページ

これらを読むと、蒙古国の成立については前述にくわしいのでここでは省略するが（註一）蒙古軍がアジアのみならず、欧州にまで遠征したその意図はただ掠奪にあつたことがうなづける。

蒙古軍の得意とする軽装騎兵戦術がこれを可能にさせたのである。欧州にまで国家の領土を求めようとはしなかった。

ジンギスカン一代の間に国を亡ぼすこと四十、朽木をぬくがごとく人間を殺すこと数百万といわれ、黒海からインダス海にいたる数千里の地は前後五年間ふみあらされ、その旧態に回復するには、優に五百年にわたる大努力を要すとあるが、これは詳述した所であるからここでは略す。

さてジンギスカン（王中の王の意）の第五代目が、フビライで、北京に都を定めて国を元と称した。日本の年号だと、文応元年の三月である。大聖人はこの年の七月十六日に立正安国論を献上されたのも不思議である。このフビライを元の世祖と称し、これが日本国に国書を発した人である。フビライの時代になると、人間の生活には遊牧生活とは別の生活のあることを知り、従つて別の政治の方法を知ったのである。今日で言えば植民政策を理解したということである。領土というより、支配下において、朝貢させるということにより、元の威力を天下に誇るということであろう。

このフビライが支配した領域は蒙古の本土および中国の外、中央アジアから、ヨーロッパの東部オゴタイ国（車国の新疆省の北部）チャガタイ国（ソ連領のキルギス共和国からカザーク共和

国東半) キプチャク国(カザーク共和国の西半から、ロシアウクライナの地域) ルイ国(イランを中心西南アジア) これらの国は、ジンギスカンの子孫をいただいた蒙古人の国家である。蒙古国の外に四つの国家に分れていても、領域の全体を統轄するのはフビライであり、帝国の領内のすべての者が服従すべき人はフビライであった。このことは実に世界歴史上で空前絶後(いままでないこと)(大学の入社試験で、これは午前中に飯を喰はないので午後ぶつたおれたという意味だ) という答案があつたそうだから、あえてルビをつけた) の領域であつた。

フビライの中国における勢力は、二代目のオゴタイが金国一二三四年(文歴四年聖寿十三)に亡ぼしたが、まだ揚子江を越えることは出来なかつた。そこには宋(南宋) 国があつたからである。

フビライは王位につく以前の一二五八年(正嘉二年聖寿三十七)に宋国を攻撃したのだが、その征戦の最中に四代目の王たるムングが死亡したので、一度は揚子江を越えた軍勢であつたが、戦をやめて燕京の(今の北京) にひきかえして、やがてえらばれて、王位につき、世祖と号し国号を元とし年号も中統と改めた。

フビライはここで南宋を亡ぼすならば、本当のアジアの主人たることが出来た。そのためにはすでに朝鮮半島を征服し、チベットもインドシナ半島も征服してしたので、南宋はいわば袋の鼠というところであつた。

ところが南宋が亡ぶ迄には二十年もかかっているのだがどういふ訳であろうか。それはフビライが南宋以上の敵をもっていたからである。四代目のムングは前述の通り金を亡ぼした人であるが、蒙古の風習では末子が相続することになっておるので、自分が出陣した時に蒙古の都カラコルム（モンゴル人民共和国外蒙古のオルホン川右岸エルデニジャオにその遺跡がある）に、末弟のアリクブカを留守居役にして、父祖の遺産の管理をまかせたのであった。ところが征戦の途中で死亡したので、ムングの後をついでフビライが王位についたが、末弟のアリクブカにしてみればだまっておられないところであった。当時のカラコルムは、アジアにおける世界的大帝国の首都であり、遠くイスラム世界や、ヨーロッパ諸国からも往来した。一二五三年（延長五年）にカラコルムにきたフランス王の使節僧ルブルックが詳細な記述をしており、それによると、諸宗教の寺院がたちならぶ中に、イスラム教寺院二、ネストリユウス派キリスト教寺院一とあるから驚くべき宮殿であった。ここの留守居役をあずかっていた、アリクブカだからおいそれとフビライの命令をきく筈がない。彼はいろいろとフビライをてこずらせること五か年間ついに中統五年の七月にアリクブカは兄であるフビライに降参したのである。

フビライは、反乱が平定したので、これを祝って、大赦を布告し、年号亀至元元年と新しくした。これは日本の文永元年にあたるのである。

さてアリクブカを亡ぼしたからフビライは安泰であったかというところ、そうでもなかった。ジン

ギスカンの二代目をついだオゴタイ家から出たグユクというのが王位をついたのだが、これを心にくく思っておったのが、ジンギスカンの末子であるツルイであつた。そこで、グユクが死ぬと、末子相続の正当性を主張して、ツルイの子ムンゲが第四代の王となつた。五代目はムンゲの次の弟であるフビライが王となつた。そこでムンゲの末子である、アリクブカとフビライとの間に五か年もの争がおきたのは前述の通りである。フビライとアリクブカとが争つておる間に、二代目、三代目と王をついだオゴタイ家のハイズというのが勢力を養つて、フビライに対抗しようとしていたのである。

だから、フビライが中統の年号を廃して至元という年号を採用した時に、イル国、チャガタイ国、キプチャク国も、フビライの大王たることを承認し朝貢を約束したが、オゴタイ国だけは反抗の態度をとり、朝貢をせぬと断言した。フビライは即位をし年号をかえても直ちに南宋をうつことが出来ず、至元三年（文永四年）にはトルキスタンに兵をすすめて、オゴタイ国のハイズを討つたが、この戦争にはフビライが負けたのである。

ハイズはこの後チャガタイ国を勢力下におき、キプチャク国と同盟した。やがてイル国もその勢力に圧倒されてしまった。ハイズの反乱はその後二十年もつづき最後にはハイズの軍が蒙古迄もせまるようになったのである。このような内憂をかかえながらも、何故、フビライは、日本をせめねばならなかつたのであろうか。

現在世界の焦点となつておるベトナムは、大聖人の時代には、安南と称していたが文永年間に、すでに元の支配下にはいつていた。従つて南宋は元に包囲された状態にあつた。この南宋を亡ぼすために、フビライは日本を利用しようとしたのであつた。宋国は南に移つてからは(元により揚子江以南に追い出されてしまつてからの後)財政上の理由から、貿易を重要視して、南遷後の国庫の収入の減少をこれによつて補おうとしていたのである。この相手になつたのが日本であつた。

宋国からの輸入品は、紙、硯、墨、書籍、青磁、白磁、唐の織物類、また修法儀式につかう香類そして宋銭、大聖人の二十一歳の時即ち仁治三年には、西園寺公経の船が、宋から銭十萬貫をもちかへつたという。銅貨ならば一億枚を輸入したことになる。

日本から輸出したものは、金が筆頭で、つぎに真珠、水銀、硫黄、松、桧、杉などの木材、刀劍、弓矢、甲冑なぞであつた。

当時乗組員百人に達する日本船が、毎年四、五十隻も往復していたというから驚く。

航路は主に、上海に近い、明州（ニンポー）を出航する。これは遣唐使船の時代からの港で、東支那海を横断して、直接九州の博多、今津、平戸などにつく、この航路だと普通で五昼夜、うまくいけば三昼夜だから、我々が思ったより早いのである。

このような状態で、南宋と貿易をしていた当時の日本が、南宋を包囲してこれを亡ぼそうとする、元からみればシャクにさわるのは当然なことで、その日本が何度使をやっても、断乎ことわるのだから、元の日本遠征となったことは当然で、日本を亡して、南宋を孤立させ、そして滅亡にみちびこうというのが、フビライの作戦であった。

南宋は元の領土内にはいったと前述したが、これは元のフビライの全き臣下となった朝鮮（当時の高麗）とは大変事情がことなっていた。

それは当時の安南は元に貢物をささげる程度の服従であったらしい。というのは、当時の安南は国勢が最も盛んな時で、一二五七年（正嘉元年）の元の襲来をくいとめ、其後も二回に渡って元が攻めたが、これもくいとめて失敗させておるからである。

安南がこのような事情であったので、朝鮮を極度に利用して、日本を征服し、そして南宋を討ちたいのが、フビライの目的であった。

全くの臣下の礼を元にとった朝鮮は、どれ程、元に利用されたか、実に語るも涙といったてい

である。

文永十一年の正月、元は高麗にたいして日本遠征のために造船を命じ、高麗は十五日から着工した。

「造船所には、木材が豊富で船の進水に便な辺山及び天冠山（朝鮮半島の南端）の海辺の山が選定された。役夫としては工匠および、人夫三万五千名（一説三万五百名）が徴集され、その三か月の糧食三万四千三百十二石余もまた高麗の負担であった。建造の船数は大船三百、軽疾舟三百、給水用の小舟三百、計九百艘。船の型は南中国様式では工費がかさみ、期日に間に合わないので、高麗様式の簡略なものと指定された」（註一）

高麗様式を採用したということは、人民を強制して突貫工事でつくらせた船であったことが、元軍の敗因だと、この著者はしているが、卓見というべきだと思う。

これは高麗政府が任命した金万慶將軍の伝記に、

「造船を蛮様（南支那風の意）によれば工費多くして期に及ばず（略）本国（高麗）の船の様式を用いて建造す」より推理した結論と思う。

船の大きさ大船というのは日本の千石船に相当する大きさであった。

さて日本を討つべき兵員はどのくらいであったろうか。

フビライは日本遠征を期してすでに文永七年の閏の十一月、朝鮮半島の南端金州に屯田を設置

し、日本征討の軍隊を農耕に従事させながら駐屯させた。次の年の文永八年の三月になると、この屯田は忻都きんとという屯田経略使が蒙古よりきて屯田は、開城、平壤、等の十か所におかれ、その兵数は六千といわれた。

高麗はこれに対して、耕地を提供するのは勿論だが、農牛三千頭、農具、種子、糧秣の全部、屯田兵六千の食糧を負担しなければならなかったから、全羅道の農民は草の実や、木の葉をたべて露命をつなぐありさまであった。

文永十一年の三月に、高麗に屯田兵長の將軍忻都洪茶丘に、日本征伐の命を下して、七月を出征の月と定めた。五月には元の日本征伐の兵一万五千が高麗に到着し、六月十六日、高麗は九百隻の工事を終了して、出航進発港の合浦がっほ（朝鮮南海の要港で今の馬山浦）に廻送を終ったと元に奏上した。

準備が完了したのに、日本遠征が十月迄のびたのは、六月十八日に、高麗の国王がなくなつたからである。

高麗国王のあとつぎは、人質の形で元の大都（現在の北京）にあつて、フビライの娘クツルガミンの降家をこの年の五月に受けたばかりであつた。父が死んだので新しい高麗王、諱しんは八月に高麗に帰り即位した。このために七月征東を定められたのがおかれて十月三日に、合浦を出発した。

総司令官は忻都（モンゴル人）副は洪茶丘（高麗人だが、祖父の代からモンゴル朝に仕えていた）リュウフクコウ（これは中国山東省の人）都督使に金方慶（高麗人）で軍勢の総数は、高麗史によると「蒙漢軍二万五千我軍八千、船員および船中の雑役夫漕手は高麗が負担しその数六千七百」とある。但し元兵の実数、蒙漢軍二万五千は多きに失する。洪茶丘伝の総数二万が本当だという説もある。文永十一年十月三日、元軍は朝鮮を出発した。

蒙古襲来についての確実な文献としては、八幡愚童訓、日蓮註画讃、竹崎季長蒙古襲来絵詞となっておる。今鎌倉妙法寺開基日澄（一五一〇年寂）の著による、註画讃を引用して元軍の壱岐対島九州への襲来をのべよう。

「文永十一年十月五日午前五時に対島の国府の八幡宮の仮殿から火焰が出たので、対島の人々は八幡宮が焼けうせたかと思つたがそれは幻でめつた。これは何事が起こると思つていた処が、その日の午後四時頃に対馬の西の佐寸さすの浦に異国の兵船四百五十艘、三万余人を乗せてよせきたつた。六日の朝八時に合戦して、守護代資国等及びその子息も悉く討死をした。十四日には壱岐の島に押しよせ守護代、平内左衛門景隆城廓を構え防ぎ戦つたが、蒙古軍の乱入により景隆は自殺してはてた。二嶋の百姓等は、男は殺し或いは捕らわれた。女は一か所にあつめて、手をと

おして船ばたに結びつけ、一人として害められないものはなかった。ついで肥前の国の松浦党数百人もうたれいけどられ、百姓の男女は壱岐対馬と同じ運命をたどった。ついで十九日午前八時に筑前の博多、箱崎、今津、佐原によせきたる」(取意)とある。

元軍の主力たる二万の軍勢は、太宰府攻撃を目的として、堂々と博多、箱崎を占領すべく二十日の日博多百道原ももしばるに上陸を開始し、一部は今津の方面にも上陸した。これらは忻都、洪茶丘の指揮する軍勢である。

これに対して、高麗人、金方慶の指揮する五千の高麗軍は百道原に上陸すると、それより鹿原そばるに至り、軍を二つに分けて、鳥飼と別府の松原に進撃した。

蒙古高麗の軍勢は午前十時より、夕方まで戦いをつづけた。

さてこれに対して日本軍はどうであったか、蒙古が対馬を襲ったことは十月十七日に京都に達し、直ちに鎌倉に伝えられた。

九州では蒙古の襲来がつけられると、太宰府守護所は、配下の武將に命令を下した。総大将としては、筑前、豊前、肥前、壱岐、対馬の守護職をかねた少式経資つねすけ当時二十九歳であった。副は豊後の守護職の大夫頼綜たのむねであり、前線には経資の弟景資かげすけが採配をふるった。

八幡愚童訓によると九州の軍勢は、

「少式、大友、紀伊の一類、白木へツキ松浦党、菊地、原田、小玉党以下神社、仏寺の司まで我

も我もとち立つて大将ばかり（？）十萬二千余騎、都合何萬騎と言う数を知らず、馬の氣天にあらがりて風をなし、蹄足地にひびいて雷をなす、日本兵共は、高麗唐人をあなどつて、面々分捕を考へると、日本兵は多く敵兵はすくない。どうして一人当てに分捕りしようか、敵兵十人に味方一人こそよいところなのに、味方は多くて敵兵一人あてにならぬことこそ残念至極」（取意）なぞと記されておつて、合戦前の勢はまことに天にちうするのていであつたが、愈々合戦が始まると、これが惨敗をきつしたのだから日本兵の残念さがわかる。

（註一） 「蒙古襲来」 黒田俊雄 中央公論社

二

紀元前四〜六世紀に成立した世界最古の兵法書である孫子の第七軍争篇古来の軍法に、

「多数の兵士を統率するには口で言うてきこえないから合図の鳴物をつかい、見てもよく見えないから目印の旗を用うる。合図の鐘や太鼓、目印の旗というものは大衆の耳目を一つにするためのもので、これによつて大衆が統一される結果、勇氣のある者でもひとりで抜け駆けはできず、臆病者でも、勝手に逃げだすことはできない。これが大勢の人間を管理する秘訣である。こ

れは敵に対しても活用できる。すなわち夜戦には大いにかがりびをたき鼓をうち、昼戦には旗を多くたてる。こうすれば実際以上に味方は多く見え、敵の耳目をまどわすのである。こうすれば敵の士気をくじき、とくに敵将の心理をかくらんすることができる。士気というものにも原則がある。たとえば、人の気分は朝は精気がみちみちており、昼はつかれ、夕方は帰ってやすみたいものである。戦さ上手は、状況に応じて士気の変化をみ定め、精気のみちた敵はさけ、つかれたり士気のおとろえたりしているところを撃つのである。味方の内部を治めておいて敵の乱れに乗り、味方は静かに準備しておいて敵が騒々しくやつてくるのをまつ」(註二)

二千年近く七集団的戦闘になれた大陸の軍勢に対して、源平盛衰記を一寸みても、

「相模国の住人鎌倉権五郎景政が末葉梶原平三景時なり、彼の景政は奥州合戦の時、右の眼を射られながら其の矢をぬかずし当の矢を射矢をいかへして敵を討ち、名を後代に留めし末葉なれば、一人当千の兵ぞ、我れと思はん大将も侍もくめやくめやと名乗りをあげて攻め入りたり」(註二)

この方式で、蒙古勢にたちむかつたのだから蒙古勢が、どつと声をあげて笑ったというのもうなずける。

日本流の合戦の開始には、両方から鏑矢かぶらをいって、矢合せの合図を交わすことになっていた。鏑矢とは矢の先きに、木または骨製の球形をつけて、それに小さな孔をあけて、飛行のさいに音

響を起こすものをいう。

蒙古軍を前にして、総指揮官の少式三郎左衛門景資の子十三歳の資時が鏑矢を射て、合戦開始の合図としたが、奇妙な音を発する矢が空高くとぶと、蒙古軍は一度にどつと笑った。

「矢合せの為とて、鏑矢を射出したりに、蒙古一度にどつと笑い、大鼓をたたきどらを打って、時をつくっておびただしきに、日本の馬共は驚ろいてはね狂うので、馬をあつかうことだけがやつとで、敵に向うことを忘れた」(註三)

蒙古軍の笑いなどを気にせず、狂う馬を制して日本側からは一騎がすすみ出て、

「やあやあ遠からんものは音にもきけ、近かくばよつて眼にもみよ、我こそは清和源氏の末孫にして……」とやりおる中に、大勢どやどやと出てきて、あつと之間にとりかこんで、よつてたかつて、この誇り高き勇士を殺してしまった。それが最初の一騎だけではなく、いたる処の戦線であんなことが起り、これでは武士の合戦ではないと、くやしがつても仕方がない。集団的戦術になれないかなしき、功名のしるしは敵の首をとろうなぞという個人的名誉が念頭に一杯では、この蒙古軍を相手にすることが出来なかつたのは当然のことであつた。

その上に武器が違つていた。蒙古軍の矢の射程が断然長かつた。そしてその矢には毒がぬつてあつたので、浅し傷でもひどい苦痛をあたえた。その上に蒙古軍には鉄砲さえあつた。鉄砲の起源は、蒙古軍がヨーロッパを遠征した時につかつたのが、起源と百科辞典にも出ておる。

「これはかなり大きな鉄丸に火薬をつめたものらしく、火繩に点火して飛ばすと空中でごう音と閃光を發して爆發し、人馬の耳目をくらました。手でなけるのではなく金属製の筒から發射した一種の大砲だという説もある」(註三)

火薬の威力を始めて、蒙古軍によつて知つた日本人の軍勢は驚いたに違いない。

これを読んで、日本軍を笑うことは出来ない。二十年前には、B二十九にはたきと竹やりで応戦出来ると思つていたのである。私も支那大陸にやられて、毎日訓練をうけておつたが、どんなことをやらされたかという、二人の兵隊が荷車を一台ひいてやつてくる、すると火焰びんと想定したサイダーのあきびんを片手にもつた一人の兵隊が荷車がごろの距離にきた時に、「ヤッ」とかけ声もいさましく荷車の下にかけこむのである。荷車はタンクの想定である。タンクを破壊する方法のもつとも確実な戦法だということである。兵隊は火焰瓶をもって戦車にひかれる。そして火焰瓶の爆發と共に一命をすてる。一人の兵士の命で一台の戦車を破壊する方法である。真面目にこの訓練をやつていた。そしてつけ加えておくが、本物の戦車は一度もみたことがなかったのだから皮肉である。

戦争というものは武器がすぐれておる方が、勝つのは、昔も今も心變りがない。

以上のような不利の状態であつても、日本軍はよく戦つた。

八幡愚童訓によると、松浦党多く打たれぬと名前をあげておる。原田の一族には深田に蒙古軍に追いこまれて敗戦した。日田青屋あしが乗った馬は元氣な馬だったので、自然に敵の陣に入つてしまつた。主人が敵陣にはいつたので、家来も、つづいて敵陣にはいり、ひしひしとまきこまれて殆どが打ち死をしてしまつた。馬だけが帰つてきたので青屋の戦死が分つた。この青屋の馬が帰つてきたのは幸運であつた。何故なぜなれば牛馬を美食とする蒙古軍は、射殺ろした馬をくつてしまふので、日本軍を驚かせたのである。山田の家来五人が赤坂を逃げてるところに蒙古勢三人が追いかけてきた。一町程も追いかけてきたが、追いつかないので、口惜しまぎれに蒙古勢が、尻をからげて日本軍に向つて、踊つてからかつた。これをみた山田の家来は、あの奴等に追いかけて残念だ、あれを遠矢にかけるものはいないかという、一人の兵が、引きうけて、「南無八幡大菩薩、願わくばこの矢を敵に当てさせ給え」と念願して矢を射たところが、あやまたず敵を射殺ろしたのだ。日本人はどつと笑い声を出して、はやしたてたが、蒙古勢は返答もなく、負傷者をせおつて逃げていった。

然しながら、蒙古勢は次第に強くなつてせめてきて赤坂の松原の中に陣をしいた。日本軍勢は、ひきさがつてしまつて戦うものといなかつた。

以上八幡愚童訓から引用したのだが、不振の日本軍の中にいて、竹崎五郎季長すえながとその手勢五

騎は、この文永のまげ戦の中で高名をたてた一人であった。

十月二十日の朝、竹崎季長は箱崎方面の陣地に配下としていたが、元軍が博多の方面に上陸してその先鋒は赤坂に対したのでその方面の戦闘に従った。

この時の竹崎季長が戦ったことを絵師に命じて絵巻にかかせ神社に奉納した。これが、八幡愚童訓と並び称される。当時の文献「蒙古襲来絵詞」である。

博多から、住居神社の鳥居の前をすぎて、赤坂に向かう途中で、菊地武房という武士が太刀と薙刀に首を二つさし、勇ましい姿で帰陣する姿に接したので、天晴れの勇士よ、自分もそれに負けるものかと竹崎季長は勇氣百倍するのだった。

但し季長は自分の軍功のみをあせるのに急だった。この文永の役では誰しもそうであったのは勿論だが、弘安の役では多少ことなつて、集団的な戦術を日本軍もとつて、大いに元軍をなやませたが、これは後日にゆずる。

従つて竹崎季長は、一門の長たる総領の指揮にも従わず、合戦にさいしては家来は五人というのだから珍しい。その代り季長の戦いは、一人の勇者が、如何に集団的戦闘に戦かつたかという最後の日本武士の見本ということが言える。

元軍は鹿原そはらに陣をとり、大将は高い所におつて、攻撃の時には銅鑼鐘どらかねをたたいてわめきたて、逃げる時には太鼓をたたくという。中には死んだ人間の腹をあけて、肝を取つてのむ、蒙古軍に

は日本軍もおどろいたらしい。もとより牛馬をうまいものとする軍勢だから、驚く方がおろかだと、八幡愚童訓は書いておる。

このような戦いの中にかげこんだ竹崎季長こそ哀れであつた。家来が誰か先きがけしたと証言する人をたててから、合戦してはといさめたが、

「弓箭きゅうせんの道は先を以つて賞とす、ただ駆けいれ駆けいれ」

五人の家来に号令して、元軍の真只中にかけていったが、家来は忽ち負傷し、自分の馬はいられて、はね廻わるのみであつたが、幸にして肥前の白石六郎の家来が、大勢かけつけてくれたので、からくも一命は助かつた。

何故この竹崎季長は、蒙古軍勢の、銅鑼や太鼓でじゃんじゃん騒ぎをする軍勢の中に、ただ一騎ともいふべき格好でとびいったのであろうか。それは季長は従来の戦闘方法が先入感となつて、急に戦術に対する頭の切りかえが出来ていなかつたからである。

軍功の種類には四種類あつた。

(一) 先がけ。他人よりさききに、敵陣に打ちいることで、名誉一番である。先述の竹崎はこれを目的としていた。

(二) 手負。自分のうけた傷のこと。討死、分捕より軍功は軽いが、戦功の一つで、竹崎季長は自分の手負いを大将景資に注進しておる。

(三) 分捕。これは敵の首を分捕ることで尋常の勝負で生けどつた首のこと。死んだ敵の首を死骸からとるのは、拾い首といって武士の恥辱とした。

(四) 討死。重大な戦功の一つである。

これらの中で、分捕りと討死が最も重要な軍功であった。

(註一) 「孫子」訳者村山孚

(註二) 源平盛衰記

(註三) 蒙古襲来 中央公論社

四

八幡愚童訓は竹崎季長の戦功の外に、菊地次郎のいくさぶりをかかげておる。

蒙古の軍勢は、赤坂の松原に陣をしいてしまったが、日本軍は、いくさのやり方が違うので、茫然としてこれのみているだけであつた。これを残念至極也と思つたのであるう、菊地次郎は、百騎ばかりを二つに分けて、押しよせて、散々に奮斗した。家子郎党は、多数うたれてしまつたが、菊地次郎だけはどうしたことか、死人の中より馳け出して、敵の頸を沢山とつて帰つてきて功名

をあげた。

この時、菊地次郎は、もし褒賞にあずかったら、一番最初に頂いたものを八幡神宮に奉納しようと思心した。後鎌倉に上つて甲冑を賜つて、自分の面目を伝えるため、子孫に残したいと思つたが、神恩の深きを思つて甲冑を八幡神宮に献納した。

この外少式入道の子息、三郎佐衛門尉景資と平四郎入道、手光太郎左衛門等が奮戦したが、いくさの仕方が違つたので、てんで問題にならず、蒙古勢は赤坂から、鹿原そはる、百道原ちもじばるを占領してしまつた。

可哀想なのは、異国合戦など、何事ならんと、のんきにかまえていて、避難しなかつた非戦闘員であつた。八幡愚童訓によると「家々に打入つて、数万人の妻子共を奪い取りける」とある。

この日の合戦は午前十一時頃より始まつて日のくれ方迄つづいたが、日本軍は夕方になると、水木城に仕方なく兵をあつめた。八幡愚童訓はこのところを「武力及び難ければ、水木城にひきこもりささえてみると、にげ支度をこそ構えけれ、之を聞き、我れ先きにとおちしかど、独りも戦う者なし」と書いておる。

しかしこのような戦況の中にあつて、前述の少式三郎左衛門景資は、思わぬ戦功をたてた。「蒙古の大將軍と思しき、長七尺ばかりの大男、ひげはへその下まで生い下がり、赤い鎧に、葦毛の馬にのつて、十四、五騎をうちつれ、兵率八、七十人を伴にしたのが戦場に出てきた。その時少

式三郎の旗の上を鳩がとび廻ったので、これこそ、八幡大菩薩の御陰なりとたのみまいらせた少式三郎は、馬乗り弓の上手の者であったから、名馬にのると一鞭をくれてはせまいって、よくひいて矢を放つと、先頭の大男の真中あたり、馬から逆さになって落ちた。あわてて従者の郎党共が大男を抱えて紛れて逃げてしまった。大将の乗っていた馬だけが、日本軍の方へかけてきたのでこれを捕えたが、葦毛の馬で金作りの鞍をおいてあった。後でこれを調査したら（蒙古の捕虜よりきいたのである）蒙古の「一方の大將流將公の馬」であった。

流將公とは、蒙古本軍の左副元師、劉復亨のことで、敵方の記録にも、劉復亨は流れ矢にあり、先きに船に登るとしてされたと言うから、これは少式三郎の大手柄であった。

しかしこの手柄が戦局を左右するというものではなく、蒙古軍は博多の街を占領し、さらに箱崎方面へも進撃しようとしていたのである。

箱崎では八幡宮を守る人々は御神体を敵に汚がされたならば一大事と思っていたが、たのみにしていた軍兵共が、水木城をさして、逃げていってしまったので、朱塗の唐櫃に、御神体を移し、涙もろとも宮を出た。何分にも火急なことなので、輿こしにも御神体をのせることも出来なかつた。東南の山手の宇美うみの宮へといそいで逃がれたが、そこには、皆な逃げた後で誰れもおらず、仕方がなく、御神体を守る人々はさらに山の上の極楽寺へと避難をした。

極楽寺の山の上から下をみると、箱崎、博多の街は猛火に包まれて赤々と燃え、浜の波頭の

み白々とみえた。やがてそのうちに雨がふりだして、山の峰や谷にかくれておる人々の涙をそそるのであった。

さて日本軍が一時引き上げ穴水本の城というのは、

「水木城と申すは前深田にて路一つあり、後は野原広く続いて水木多豊なり。馬蹄飼場よく兵糧倉庫あり、左右の山あい三十余町をとうして、高ききびしくきずいてあった。木戸口には磐石門をたてていた。今はその礎石ばかり残っておる。南は山近く梁川が流れておる。北の山のふもとには、深く広く堀をほって、二、三里廻っていた。これは左から、異賊を防がんとための大城郭であつた。此のようなゆゆしき城であつても、博多、箱崎をうちすてて落ち入つたので、末はいかになりゆくかと、泣きまどい、悲しまざるぞなかりけり」と八幡愚童訓は示しておる。

「さる程に夜もあければ、二十一日の朝の海の面をみやるに蒙古の船一艘もなく、皆々馳せ帰りけり」と八幡愚童訓では、この箇処で神風が吹いたとか、台風がふいたとかの記述はない。

然し高麗史によると「夜大風雨にあい、戦艦岩崖にふれ多く敗る、金金侏（高麗の將軍）溺死す」とあるから台風は事実だつたに違いない。然かも、蒙古軍の戦歿または行方不明は一万三千五百人に上つて、全軍の約半数を失つたことになる。昨日の勢にもいらず、蒙古軍の敗戦だつたことは次ぎの八幡愚童訓の記述によつても証明が出来る。

「今日は九州全体の人々は、皆滅亡と昨夜からなげきつつ朝を迎えたのに、蒙古の軍船がみな帰

つてしまったのは不思議なことよと、泣き笑いの色を顔に出てやっと、人心地がついた。所が蒙古勢のにげおくれた兵船一艘が志賀嶋をさして逃げようとしていたが、誰もおそれて、日本軍からは手だしをしようとしなかった。船の蒙古軍はその中に手を合せて、日本軍を拝み始めたが、原因がわからないので、ためらっておると、日本軍が助け舟もよこさないのは、降参も許さぬ気持だと思つたらしく、かれこれする中に大将と思しき將軍は入水して相果ててしまった。残つた蒙古軍は水を渡つてきて、弓箭をなげすて、兜をぬいで降参の意をしめた。その時になつて、始めて蒙古軍の意志がわかつた日本軍は、我も我もおしよせて、高名顔に、蒙古軍を生捕りにしたが、残つた兵は、浜辺にならべて二百二十人ばかりを斬つてしまつた」

この頃になると、蒙古が退散したと、此処彼処より人々が博多箱崎の焼け跡に集まりはじめた。むろん箱崎八幡宮は敵の手で全焼してしまつていた。親は子をたずね、夫は婦をもとめた。家は焼け、資財は盗みとられて路頭にたたずむばかりであつた。折りしも、焼跡の灰が、無情な浜風にふきあげられて空をおおい、目もあてられぬ有様であつた。只々茫然として思うのは、一夜でもつて、かほど変りはてるものか、うめいてみると、昨夜難をのがれた人々が、街にかえつてきたのか、家も跡かたもなくなり、噫々あさましいと、同じ思いの人々が沢山いて、武力つきて、かかる大敗北では、国家のゆくすえが思いやられるとただなげくのみであつた。

後世、恐ろしいものごとを、「むくり、こくり」と言うようになったのは、むくりは蒙古の

こと、こくりは高麗のことであると云われておる。即ち、

「九州風俗記という物に、此の国の俗、物のおそろしき事を（むくり、こくり）と言う。古老伝えて曰く、文永のむかし高麗人の案内にて、蒙古の賊が襲いし来し時、北九州は皆のりとられ乱暴狼籍限りなく、人家は草木までも残さじとて、民屋を焼きはらい、逃げまどう妻子春属一人ものこさず、山谷にかくれたる者までさぐりもとめて、とりつくしにけり。近き頃まで、其処此の山間、谷底、洞穴のうちなどに其の時の跡あり。昔よりこのかた今に至るまで、此の国の女児どもは（むくり、こくり）と言つて恐れけり」

然かもこの「むくり、こくり」の言葉は、九州だけではなく、全国的に伝わった。

「蒙古人、高麗人、筑紫に進入して多く人を殺す。村民、野夫、妻子をたづさえて、にげて深山に入る、九州の騒動のこと、京師関東に達し、庶民大いにおそる、時の人此の乱を以て蒙古国を爾して、俚俗とよんで、むくり、こくりとて曰へり」

（註一） ムクリコクリ、（一）むくりは家古、こくりは高麗の義、後宇多天皇の御代に我国に襲来

したよりいうと。（二）恐ろしい物にたとえる、昔小児の啼くを止めさす時におどしてかく

言う、これは平凡社刊の大辞典二二三—二四にのせるところである。





